

教育新報

新大教育学部同窓会

第 162 号

発行人 佐藤重勝
事務局 新潟大学

教育学部内

TEL(025)263-6760

印刷所 (株) 文久堂



絆・つながり・同窓会

教育学部同窓会 副会長 安達 徹

徹

二〇一一年の「今年の漢字」は「絆」でした。

東日本大震災では、家族の絆の大切さが改めて認識されました。また、避難所での生活や復興でも地域の絆が大きな力となっています。全国各地からの支援やボランティアは、被災地の方々とのつながりを生み、絆を深めてきました。

一方、ワールドカップで優勝した女子サッカー「なでしこジャパン」もチームの絆が、優勝の原動力になったと言われています。

人と人が互いに協力し合い、支え合うこと、つながりと絆、これこそが今の時代に最も求められていることではないでしょうか。

翻って、同窓会はどうでしょう。教育学部同窓会会則第四条には、「本会は会員相互の親睦と資質向上を図り、

母校の発展に寄与することを目的とする。」とあります。時代は異なっても

新潟大学教育学部・教育人間科学部で学んだ者同士、同窓生と母校の先生方が「つながりを保ち、絆を深めること」こそがこの同窓会の目的にほかなりません。

平成二十三年度は、活動の重点として、以下の五点に取り組みました。

(詳しくは事業報告に譲ります)

一、「同窓生の集い」の充実
第三十八回同窓生の集い

二、広報活動の充実

・「教育新報」年二回の発行

・ホームページの充実

三、組織の充実と強化

・支部長・学科代表者会の開催

四、大学との連携

・母校への支援

・学部教職員との懇談・懇親

五、全学同窓会との連携

・全学同窓会交流会への参加

・「新潟大学カード」の利用促進

研修部、広報部、組織部、交流部の方々のご尽力により、いずれの事業も充実したものになってきたと感じています。一般会員の方も是非多数参加していただけたらと思います。

平成二十四年度は、教育学部同窓会発足六十周年の記念の年にあたります。特別なことはしませんが、事業の見直しと改善を図り、より充実した同窓会活動にしていきたいと考えています。

会員の皆様には、次のことで同窓会活動に参加し、つながりを広め、絆を深めていただきたいと思います。

一、大学時代に仲良くしていた同級生との親交を継続、時には拡大すること。県外にいる方にも同窓会に関心をもっていただければ幸いです。

二、各学科ごとの集まりに参加してみること。まだ、各学科の集いを実施していない科は、六十周年を機に集まってみてはいかがでしょうか。

三、各学校で大学と連携した取組を進めること。教育実習生への力の付く指導や大学との共同研究など。

四、「教育新報」「教育学部同窓会ホームページ」に目を通すこと。

そして、最後に

五、会費を納入すること。

花鳥風月

「やつて見せ 言つて聞かせ
て させてみて 讃めてやらね
ば 人は動かぬ」山本五十六の
愛語である。三国同盟並びに米
英との開戦に反対した人物とし
て映画化され、先日鑑賞してき
た。五十六は、河井継之助、小
林虎三郎と続く長岡藩二百年の教えが
創り上げた不言実行の人物と言われて
いる。私と五十六との出会いは、教育
学部長岡分校当時に始まる。長岡地区
の学校に勤務した時には、先輩諸氏か
ら五十六の言葉をたくさんご教授い
ただいた。

「男の修業 苦しいこともあるだろ
う。いいたいこともあるだろう。不満
なこともあるだろう。腹の立つことも
あるだろう。泣きたいこともあるだろ
う。これらをじっとこらえてゆくのが
男の修業である」

「ゴムをいっぱい引っ張り、伸び
きつてしまつたら、再びゴムの用をな
しませぬ。国家としても緊張するのは
大切だが、その反面には弾力性を持つ
余裕が無ければならぬ」

五十六は、謙信公と良寛を越後が生
んだ二大偉人とし、良寛研究にも熱心
であつたという。會津八一は、力の限
り仁慈を尽くし、ソロモン諸島の空に
神となつて亡くなられた「山本元帥」
に対して次の句を残している。

現人の 力をつくし わたつみの
空の中に 神去りにけり (勇)

新潟大学教育学部同窓会

第三十八回同窓生の集い

今年の「教育学部同窓生の集い」は、十月八日土曜日に、新潟市のだいしホールにて、「松浦良治」歌とピアノコンサート」として開催されました。

松浦良治先生は本学部の教授であり、歌曲の伴奏とピアノソロ演奏された栄長敬子先生は新潟青陵大学短期大学部准教授でいらつしやいます。

プログラムは、歌曲として、イタリア古典歌曲集と平井康三郎歌曲集からの抜粋、シューマンの歌曲集「詩人の恋」から全十六曲が演奏されました。



その中に、シューベルトとシューマンのピアノ曲を独奏していただくという、楽しくて変化に富んだ構成でした。

聴衆の心に響く松浦先生の歌声、ペーゼンドルフアーを奏でる栄長先生のピアノの音色。贅沢な時間を過ごすことができたという声が多く聞かれました。

会場を移動しての懇親会にも、お二人の先生が参加くださったおかげで、コンサートの余韻をまた楽しませていただくことができました。お二人の先生方には心より感謝申し上げます。

コンサートには、主催者を含めて、百三十八名の参加者がありました。恒例となった市民開放型同窓会事業としての演奏会であったため、一般市民の方々からもアンケートをいただきました。そのアンケートから、「すばらしい演奏会なので、この人数で聴くのはもったいない」というご意見が多数ありました。研修部としては事務局と連携して集客に努力はしてきたのですが、なかなか実を結ばなかったという反省が残ります。

★アンケートより

同窓会会員の声

・ 本場に素晴らしい演奏会！感動と心のリフレッシュをいただきました。心より感謝申し上げます。役員の皆様ご苦労様でした。

・ しみじみと心に響いた歌声でした。シューベルトの即興曲（第3）心地よかったです。

・ 日本の歌曲を味わい深く聴かせていただきました。また、歌とピアノの掛け合いを楽しく鑑賞させていただきました。（だいしホールのピアノの）ペーゼンドルフアーのすばらしい音色が楽しめました。ありがとうございます。

・ 松浦先生の甘く温かい歌声と栄長先生の弾むピアノの調べが、繊細に様々な情景を表現していて、心に響いたひとときでした。

・ バラエティに富んでいてよかったです。よい内容でしたが、思ったより来場者が少なく残念でした。

・ 無料で音楽にひたれて大変よかったです。

★アンケートより市民の声

・ 益々冴えた還暦を過ぎた松浦さんのお声と栄長さんのピアノの音色、感動でした。お二方の益々のご活躍を陰ながら応援・期待しています。



・ 松浦先生の声量はきれいですすばらしかったです。どの音もはつきり出ていてすごいと思いました。栄長先生のピアノは、とても聴きやすくメリハリがあり、すばらしかったです。

・ 歌曲集「日本の笛」より、短い曲でしたが、とても気持ちよく聴けました。ピアノ「蝶々」、私は心強く聴けました。アンコール曲のシューベルトの「ます」、シューマンの「トロイメライ」は、どちらも心に残りました。もっと多くの方に聴いてほしいです。

・ 「蝶々」ととても良かったです。久しぶりにピアノの生を聴き、別の世界に來た思いでした。



・家のテレビで見るコンサートですが、たまには、こういう演奏会もよかったです。

・多忙な日々を過ごしている今日このごろ、今日のように落ち着いた雰囲気です。

・演奏会を聴けることは幸いです。ありがとうございます。感謝します。今後も楽しみです。

・言葉に尽くせない感動がありました。音楽の魔法です。

会員の広場



オレンジの いち

五泉市立五泉南小学校
佐藤 祐子

ふとした拍子に思い出す場所があります。田んぼに囲まれた小さな小学校のあるところで、春になるとチューリップの花がたくさん咲くところでした。地域の人達がチューリップを栽培しているのです。

「あんだ、知ってるかい？春になるとね、この辺はオレンジのにおいがするんだよ。」

話しかけてくれた地域のおじさんは、くしゃくしゃの笑顔でした。

「この辺で作っているチューリップでね、オレンジ色のかあわいいのがあるんだよ。」

まるで自分の孫の話をしているように愛おしそうに、ちよっと自慢げに。



月日は 過ぎのいっ

新潟市立万代長嶺小学校
長沢 剛

秋から冬の終わりまで講師として勤めた小学校。私がこの仕事を始めたスタートの場所。いつかオレンジのにおいがするところに、また行きたい場所です。

昭和五十七年度、まだ真新しい教育学部に入學した。五十嵐キャンパスに移って三年目。教養で過ごした二年間、専門で過ごした二年間。卒業して早二十六年目。月日は過客のごとし。

今年度、息子も同窓に加わった。奇しくも東日本大震災の影響で入学式は行われず、代わりにオリエンテーションが行われ夫婦で参加した。

学内の変化は著しい。教養部前の広場にあるコンビニには驚いた。大学周辺部も飲食店や近代的なアパートなどが所狭しと立っている。「あつ、この店まだやってたんだ」「ここに住んでたんだよな」「あそこにアパートがあったんだだけだ」。あのころの自分と仲間の姿や言葉が浮かんで感慨深い。亡くなった同級生もすでに何人かいる。彼らの分も精一杯生きなければ。



ありがとう

新潟県立
村上特別支援学校
安藤 淑美

「新しい人！転校生！淑美さん！」

小学生のころ、このフリーズで私を覚えてくれた特別支援学級の友達。彼と出会ってから十数年経った今、特別支援学校に勤めることができた。

教師へと立場が変わったが、子どもたちと勉強したり遊んだりする楽しさを感じている。しかし、まだ教師三年目。この道の難しさに悩むことも多い。そんなとき、励みになるのは思い出す友達の顔。温かい言葉を掛けてくれる同僚の先生方。アドバイスをくれる大学の恩師・同期生。拙い授業でも笑顔や成長を見せてくれる子どもたち。たくさんの人の支えを実感する。

夢を叶えてもなお、不安や戸惑いがある。その中で、この道へ希望や自信をくれた人たちに感謝の気持ちでいっぱいである。今、声を大にして言いたい、「ありがとう」。

学校紹介

①

かみ小国和紙プロジェクト
地域素材で児童と地域を元気に

長岡市立上小国小学校

当校区には、無形文化財に指定されている小国和紙・発祥の地があり、その技を次世代につなげるために立ち上げた小国和紙生産組合もある。昔は冬の仕事として身近な和紙作りであったが、児童の和紙作り体験はなかった。

そこで、昨年度、紙と上小国を掛けて、「かみ小国和紙プロジェクト」を立ち上げ、様々な教育活動で地域の素材・小国和紙に関われるようにした。

昨年度はグラウンドで育てた楮（コウゾ）で自分の卒業証書を漉（す）く、雪の模様を入れた卒業記念屏風を漉く等の活動を立ち上げた。また、へき地教育研究会では、児童作の和紙のペーパーウェイトや、小国和紙生産組合さんのご協力の下、和紙のオブジェなども展示し、児童や地域の方々に現代風和紙の活用も紹介する役目を果たした。

三月の東日本大震災後、中越大地震・中越沖地震の二度の被災地でもある当校としては、被災地に何か役に立ちたいと考えた。今年度のプロジェクトは、夏の暑さを雪の模様で涼を感じてもらおうと、小国和紙で「復興うちわ」を作り、被災地等に送る活動を行うことにした。

中心となった六年生は十三人、全校

児童五十六人、世帯数四十二戸、目標四百本。

手作りの「復興うちわ」を考えると数字上は無理な計画であった。

六年生が家庭・地域に呼び掛けたところ、複数回の作業日に、延べ三十人ほどの地域・保護者の方々が参加してくださった。最終的に三百四十六本を作ることができ、被災地に送ることができた。児童のやる気と地域力に感謝。

この体験は、中心になって活動した六年生にやり遂げた自信をもたせることができた。また、春のころに「中越や中越沖地震の恩返しをしたいけれど、今は何も出来ない」と何とはなしに心苦しいと思っていた地域の方々に、学校が地域の代表として恩返しをしたという安堵感をもたらしした。

昨年二月ころは、長岡市の新庁舎も入る市民交流施設「アオーレ長岡」の内装に小国和紙が採用されたと聞いていたので、「かみ小国和紙プロジェクト」の活動で「アオーレ長岡」に関わりたいと願っていた。

この「復興うちわ」活動で、充実感



をもてた九月に「アオーレ長岡」のオープニング事業の参加への声が掛かった。小国和紙が内装「アオーレ長岡」に当校の教育活動の足跡が残れば学校と地域が元気になるという願いが叶う。即断・即決。取組が開始された。年度途中での事業参加であったが、「復興うちわ」で見せた地域力で、プロジェクト第三弾の開始である。

「アオーレ長岡」を飾る陶板「アオーレ・バード」が上小国小で産んだ「復興うちわ」の端紙で作った試作和紙「小たまご」行灯。



この試作品がアードイレクター森本千絵さんに認められ、和紙行灯で長岡花火やアオーレ・バードを再現することになった。その後、短期間で二百個の「アオーレたまご」を和紙で作し、撮影当日は、「アオーレたまご」行灯をもった児童・地域百名ほどが参加した。

当日、「復興うちわ」で見せた地域力で「アオーレたまご」ができ、グラウンドに長岡花火や「アオーレ・バード」が灯った。四月の「アオーレ長岡」竣工時に映像で流れることになっている。小国和紙内装の場で、地域力が結集した「灯」をご覧いただきたい。

「アオーレで、会おうれ!」(長岡弁)
(文責 安井 靖子)

平成23年度
会務報告

平成二十三年

5・7 平成22年度 会計監査

5・7 本部会 (新潟教育会館)

【平成22年度会務報告・会計決算報告】

【平成23年度活動の重点・各部の活動計画・予算案】

6・4 学科代表者会・支部長会 (組織部主催)

専門部会 (研修部・広報部・交流部) 評議会 (新潟教育会館)

【平成22年度会務報告・会計決算報告】

【平成23年度活動の重点・各部の活動計画・予算案】

教育学部同窓会パンフ3号発行

教育新報第161号発行

災害見舞金送金(第1次) 14名

被災状況・臨時採用教員実態調査

正副会長専門部長・研修部打合せ (新潟教育会館)

10・4 コンサートリハール実施

学校紹介
②

地域に貢献する学校を目指して

佐渡市立内海府中学校

両津港から約三十一キロメートル、北に自家用車を走らせると当校の校舎が見えてきます。学区は佐渡市の北端に位置しており、八つの集落からなっています。全校生徒は十二名、二学級の学校です。

第二代校長高昌孝先生作詞の校歌に「海の幸」「山の幸」とあるように、豊かな自然に恵まれ、学校の教育活動に地域・保護者が大変協力的な地域です。



当校は、環境美化活動に積極的に取り組んでおり、新潟県環境賞（平成十七年）、地域環境美化功績者表彰（平成十八年）、全国海岸協会功労者表彰（平成十九年）、佐渡市褒賞善行部門表彰（平成二十一年）など、その活動は高く評価されています。

内海府中学校の生徒は、素直で、労をいとわず、根気強くものごとに取り組みというよさをもっています。

平成二十四年一月には校舎の改築が終わり、平成二十四年四月からは内海府小学校と内海府中学校が同じ校舎で学ぶこととなります。その利点を生か

し、小中九年間を見通した教育活動を展開するために、小学校と中学校の教職員で着実な準備を進めてきました。他校ではできない教育活動を実践したいと考えています。

今年度（平成二十三年度）、当校は新しい試みとしてガイドボランティア活動に取り組んでいます。平成二十二年五月に当校の一年生が島内探訪で小木へ行きました。小木中学校の生徒がボランティアガイドを行っていることを知り、自分たちもやってみたいという声があがったのです。

生徒の現状から、次のような課題があると考えられました。

一 全員が親元を離れ、高等学校へ進学しなければならず、自立心の育成が必要である。

二 海府地区の自然や文化等のよさを十分に理解しているとは言えない。

三 地域の人以上と接する機会が少なく、コミュニケーションスキルを伸ばす機会がない。

自分たちが住む地域のよさやすばらしさを伝えるガイドボランティア活動は、これらの課題の解決を図るために

有効ではないかと思われました。

ガイドボランティア活動が地域の活性化に役立てば、生徒が地域に貢献し

たと実感できます。

また、多くの人と接することができ

ガイドブックを作

成するため「植物」

「地学」「野鳥」「魚」



について講師を招い

て学習会を開き、ガイドの練習を積み

重ねました。当校独自の活動として、

タブレットPCを用いたガイドをしよ

うと考え、購入しました。十二月にタ

ブレットPCを用いたガイドをするこ

とができました。大変好評で、生徒も

自信を付けたようです。

タブレットPCには多くの情報を保存が可能で

相手の知りたいことや自分が伝えたい

ことを多くの情報から選択して示すこ

とができます。一方的な説明になりや

すい紙による情報提示よりも、コミュニ

ケーションスキルを身に付けるため

には、タブレットPCによるガイドが

有効であると思われました。

タブレットPCをほかの場面でも活

用する工夫をしながら、ガイドボラン

ティア活動を続け、地域に貢献できる

10・8	【第38回同窓生の集い】開催 コンサート 懇親会 32名参加
10・12	災害見舞金送金（第2次）4名
10・14	附属新潟中学校秋の研究発表会
10・20	附属長岡3校研究発表会
10・21	附属特別支援学校研究発表会
10・22	【新潟大学・全学同窓会交流会】 講演会 懇親会 21名参加 13名参加
12・10	役員会 （新潟教育会館）
1・27	附属新潟中学校冬の研究発表会
1・19	教育学部教員・職員との 懇談会（新潟会館）
2・9	附属新潟小学校研究発表会
2・15	教育新報第162号発行
3・3	本部会 （新潟教育会館） 【平成23年度会務報告・ 各部活動反省・会計執行状況】 【平成24年度の活動方針・予算案】
3・23	新潟大学教育学部卒業式 同 卒業記念祝賀会

平成二十四年

全学同窓会 交流会の報告



十月二十二日(土) 十五時から、ANAクラウンプラザホテル新潟を会場に平成二十三年度新潟大学・全学同窓会交流会が開催された。下条文武大学

長の開会の挨拶の後、新潟大学研究トピックスとして新潟大学大学院医歯学総合研究科テニユア・トラク准教授の杉山清佳様から「赤ちゃんの脳の柔らかさの秘密」という演題で講演をしていただいた。赤ちゃんの脳の働きが特に活発で、しかも情報吸収力が旺盛なため、語学、視覚、聴覚などを早期に教育すること、幼児教育が大切であることを学ばせていただいた。

講演は、医歯学総合研究科予防医学学分野教授の岡田正彦先生から「ほどほど健康術」元気で長生きする秘訣とは？」という演題

で、運命に逆らわない「ほどほど」の生き方についてご講演いただいた。科学的に正当な方法で得られたエビデンス(科学的根



拠)を基に、左記の「ほどほどの健康術」を学ばせていただいた。

- ① 一日六〜七時間の睡眠
 - ② BMIを二十二〜二十五に保つ
 - ③ 一日一杯のお酒をゆっくり飲む
 - ④ 一日三十分、週三回の運動をする
 - ⑤ 和食を中心に、時々洋食を食べる
 - ⑥ 野菜・果物はたっぷり食べる
 - ⑦ 塩分・コレステロールは減らす
- タバコはほどほどではなく絶対ため、百害あって一利なしである。以上が健康の秘訣だそう。

全学同窓会では、懇親会では、全員で「四季の新潟」を合唱し、大学の運動系、芸術系の部活動並びに図書館関係への資金援助贈呈を行った。



学科の活動 《英語科》

英語科 同窓会活動

金子 一男
(新潟第一高等学校)

英語科の同窓会は昭和三十五年に「会員相互の親睦と研鑽」を主な目的として発足し、初代会長には英語科一期生丹呉昭三先生が就任されました。

その後、二期生の第四代会長高橋満先生のご尽力により、昭和五十七年英語科同窓会開催時に、第一回新潟大学教育学部英語学会も同時開催することができました。とかく学校現場に入ると、日ごろの雑務や生徒指導に追われ、英語の研修がおろそかになりがちです。そんな中でも、互いの研究の成果を聞き、先輩・後輩・同期の同窓生が混じり合って討論し、その後、盃を傾け合って語り合い親睦を築くことが可能になったのです。

加えて、英語科同窓会では、昭和三十三年より同窓会誌『リユニオン』を発行してきました。同窓生の近況報告や同窓会名簿等に加え、教育学部英語学会発足後は、前年の発表内容報告も掲載してきました。これも昨年までで

四十三号になりましたが、この同窓会誌の発行は順調なものではなく、何度も資金不足になり廃刊の危機に直面しました。しかしながら、ここまで発行し続けられたのは、リユニオン(再会)の灯だけは消してはならぬという歴代の同窓会長の並々ならぬ決意と運営努力の賜であると感謝しております。

このような諸先輩方の努力がありながら、現在の同窓会の現状は、決して理想的なものとは言えません。一昨年の英語科同窓会・英語学会参加者数は、学部生を含めても三十名でした。現在約六百七十名の英語科同窓生がいることから考えると、せめて五十名を超え参加者を毎年集めて当然だと思えます。現在、同窓会事務局を固定せず、二年ごとに三十代半ばの同窓生が担当し、それを機に同窓会に出席してもらいたいと思っております。同時に、教育学部英語学会を充実したものにし、学校現場でも生かせるような研究会にしていきたいと考えております。

昨年、小学校五・六年生で「外国語活動」が必須になり、より広い視野から英語教育を考える時代がやってきている折、より一層同窓会活動を盛んにして、英語科同窓生の活動を支援したいと思っております。

学部との懇談会

大学と教育現場相互の
熱い思いがあふれた懇談・懇親会

交流部部长 山下 あい子

一月十九日(木)、新潟市の新潟会館において、新潟大学教育学部教員・職員と同窓会役員との懇談会・懇親会が行われました。毎年、同窓会の交流

部が企画・運営する事業で、今年度も大勢の方々にご参加いただき、相互の交流を深める有意義な会となりました。

大学側からは、ご多用の中、五十嵐尤二学部長様をはじめ、十五名もの教員・職員の方々からご出席をいただき、同窓会からは佐藤重勝会長以下十四名が出席しました。

懇談会では、最初に佐藤会長から、同窓会の集い等の事業成功の報告と感謝の言葉、同窓会六十周年事業等への協力のお願いがありました。その後、同窓会



挨拶をする佐藤会長

の各専門部(研修・広報・組織・交流・事務局)の事業概要について報告を行いました。

五十嵐学部長様からは、教育学部の現状や課題について具体的に説明していただきました。



学部の現状を説明する五十嵐学部長

入試に関しては、倍率は約三・九倍、推薦入学生と一般入学生の入学後の状況を調査し、推薦入試制度を検証していく必要があるとのことでした。

大きな課題は、卒業直後の就職への就職率の低下です。新潟県・市の新採用枠が少ないので、翌年の採用試験に

備えようと、教育現場で学べて且つ時間的に余裕のある特別支援介助員等への就職が多くなっているとのこと。そのため、卒業二年目の就職率は高まるが、大学の実績として全国比較される一年目の就職率に介助員は算入されないもので、評価が低くなるとのことでした。しかし、教育委員会は、教員資格のある優秀な介助員を求めており、大学・卒業生・現場それぞれのニーズが満たされるような就職支援が急務であることが分かりました。

また、学生の大学生活や就職へのモチベーションを維持するために様々な取組が行われており、フレンドシップ事業等、子どもと触れ合う楽しさを体験させる取組も紹介されました。

後半の意見交換では、教育現場で今求められている教員の資質について活発な意見交換が行われました。新採用教員の立場からは学級経営力、管理職の立場からは報(告)連(絡)相(談)をはじめとするコミュニケーション能力が教員には必要であることが、実例をもとに話し合われました。その力を高めるために、大学でも現場でも、学生や新採用教員を鍛え続けていくという意識と努力が、先輩教員である私たちにも求められていると感じました。

柳原昌子同窓会副会長のあいさつで懇談会を閉会しました。

会場を移動しての懇親会は、滝澤かほる副学部長様の乾杯のご発声で開宴となりました。

懇談会では出された数々の課題解決への取組や大学と学校現場の双方での情報交換など、教育に関する尽きない悩みや熱い思いを語り合いました。時間が足りないのがとても残念でした。

八杵友広副学部長様からは、学部と同窓会のさらなる連携と発展への思いを込めての万歳をいただきました。

最後に、安達徹同窓会副会長のあいさつがあり、教育力向上のための一層の連携を確認し、閉会となりました。

会員の皆様には、今後も学部と同窓会に絶大なるご支援をいただきますようお願い申し上げます。



懇親会

大学のコーナー

震災からの復興に向けた心の交流

新潟大学教育学部准教授 笠 巻 純 一

東北太平洋沖地震から一年あまりが経過し、震災直後の交通機関や物流の混乱、避難所・仮設住宅の確保の問題等は、ある程度解消されたかのように感じます。しかし、津波による被害や東京電力福島第一原子力発電所の事故に起因する放射線被ばくの問題、食の安全を確保するための対策、被災地等における子どもたちの心のケアに関する対策など、復興に向けての課題は山積しています。

原子力発電所の事故以来、被災地では、放射能に対する不安から、給食を拒否して弁当を持参させる家庭、晴天でも傘を差して登校する児童、ほとんど一日中窓を閉め切って行われる授業など、子どもたちの学校生活が一変したという話を耳にします。被災地の子どもたちは、地震や津波、放射能への恐怖など、実際に被災した者でなければ分からない大きなストレスを心に抱えていることでしょう。

各種報道や被災地で生活する知人から、子どもたちの学校での様子を見聞

することを通して、物質的な支援もさることながら、被災者の心の痛みに寄り添い支えることから始めることが大切だと感じました。また、子どもだけでなく、子どもを守り育てる教師や保護者の心のケアにも目を向けることが大切だと思いました。震災によって家や職場を失い、生活環境が急激に変化した大人への心理的サポートを、地域全体の取組の中でどのように継続していくかが今後の課題ではないでしょうか。被災地の復興には十年単位という長い年月が必要といわれていますが、一日も早く被災地の方々が安心し、心から笑顔で暮らせる日常が訪れることを願わずにはいられません。被災した方々の心の健康を、保健、医療、教育に関係した人々のさらなる連携・協力によって長期的に支えていくことが必要と思われまます。

昨年の夏休みに行われた養護教諭特別別科同窓会では、被災地で暮らす会員から、「会える機会を見送ってしまった、会いたい時に会えないかもしれない」という声が上がり、再会を喜ぶ姿を多く目にしました。私にとっても友人・家族とのこと、教育に関することなどを振り返る機会となりました。日々の生活の中で、あらゆることを合理的に進めるあまり、人として大切なものを見失っていないかと自問しました。

震災からの復興、そして、それを支える一人一人の健康の基盤は、人々との心のつながりではないでしょうか。建物や道路、経済の復興に向けた歩みとともに、心を支えるネットワークが広がることに期待を寄せたいと思います。今後、復興への長い道のりのなかで、心の交流を通して自分自身の役割を模索するとともに、その時にできる支援を一つ一つ実行に移していこうと思います。

事務局だより

●会費納入ありがとうございました
学校代表の皆様には、会費納入やアンケートの取りまとめをしていただきました。ましてありがとうございます。

●災害見舞のお礼の手紙です

東日本大震災と長野北部地震で被災された会員や学生十八人にお見舞金をお送りいたしました。

「普段は同窓会の存在はあまり意識していませんでしたが、このようなご支援に勇気づけられました。このご恩は、現場で返す心意気で頑張っていく決意です。」

「先日、お見舞金が送られてまいりました。このようなご配慮に驚いています。本人には早速伝えたいと思います。学業に益々精進していくよう親として支えていきたい気持ちを新たにしております。」

●年度末になり、ご多用のことと思います。全会員の皆様、ご協力いただきましてありがとうございます。

編集後記

皆様のおかげで今年も二回の教育新報をお届けすることができました。皆様の声を紙面に載せたいと思います。会員支部・学科の情報がありませんでしたら、事務局までお知らせください。

